

共創システムと場の共有 —共創シンポジウム 2005—

東京工業大学・大学院総合理工学研究科 ○ 三宅美博

Co-creation System and “Ba” —Co-creation Symposium 2005—

○ Yoshihiro MIYAKE Tokyo Institute of Technology

Abstract: Recently IT systems are widely used in our daily life and our communication style are rapidly changing. As a result, our social communities are gradually weakened and collapsed. To overcome this situation, we've already proposed the concept of “Co-creation” and developed some engineering support systems. In this year, we organize the Co-creation symposium 2005, and will discuss about “Co-creation system and resonance of Ba” from the viewpoints of not only psychological, theoretical basic researches but also engineering and social practical activities.

1. はじめに

共創システム部会では、昨年より共創シンポジウムを実施している。2004年度は8月27～28日に早稲田大学で開催され、「コミュニティの共創へ向けて—その技術とシステム論—」をテーマとし、100名以上の参加者が2日間にわたって討論した。そこでは、現代の閉塞的社会状況を克服するには共創というパラダイムが不可欠であることを確認することができた。今年度はこれを踏まえてSI2005の中で第2回共創シンポジウムを開催する。「共創システムと場の共有—身体性・社会性とその再構成—」をテーマとして研究発表とパネル討論を行なう予定である。ここではコミュニティにおける場の弱体化という社会的現実を背景として、場の共有を支援する共創の技術とその基盤について総合的に話し合う。

2. 社会的な背景

いまコミュニケーションを支援する技術の中で、場の共有について関心が高まっている。その背景には、近年、急速に拡大しているIT型のコミュニケーションにおいて、そのような場の共有の支援が困難であるという技術的限界があり、それに伴って人間のコミュニケーションや社会形態が急速に変化しているという現実がある。しかも、このような変化の中で、社会の信頼性や安全性を脅かす事態が、身近な領域で頻発しており、われわれの生活を支えてきたコミュニティという場の弱体化が確実に進行していることを誰もが日常的に感じている。そして、そこからの出口を見つけれないまま、漠然とした不安感と閉塞感を感じつつ日々の生活を営んでいるのではないだろうか。

このような社会の現状に対して、日本人の86%が10年前よりも安全ではなくなったと考えており、もはやこの現実にも誰も目をそむけることはできないであろう。その意味でも

失われつつある場を再生し社会的な安心を再興することは、いまや時代の要請である。では、どのようにすれば安心の場を再生できるのだろうか。本シンポジウムでは、このような社会的状況を背景として、場の共有支援技術について議論する予定である。

このような場の共有を志向する技術で問われていることは、広く捉えれば、科学技術の社会的責任の問題でもある。この問題には近年急速に関心が高まっているが、いまや社会システムに大きい影響を及ぼしてしまう科学とそれに基づく技術が、それを包摂する人間や社会と無関係に暴走することは許されないからである。上記のIT化の例も、科学技術によるコミュニティという場の破壊であり、環境破壊と同根の問題である。ここには従来のシステム論が外部として無視してきた領域とシステム自身との関係をもはや無視できなくなっているという現実がある。これは科学技術側から見れば、その拘束条件をどのように生成するのかということであり、科学技術と社会のインタフェースの問題であり、リテラシーの問題であり、企業の社会的責任(CSR)の問題につながるものでもあろう。共創システムの立場では、これは場所的な拘束条件の生成の問題として捉えてきた歴史がある。そして、この延長上で場の共有の必要性が明らかになり、最終的には共創システムと従来型の科学技術との関係も明確化されるものと期待される。

3. 場の共有について

では、なぜ場の共有は必要なのであろうか。ここでは人間の協調作業を伴う共創的コミュニケーションの具体例として、サッカーの連携プレーを考察してみよう。もちろん、これは直接的な意味での社会システムではないが、問題の内包する本質的な特徴を明確化する上では有効な例題となる。

サッカーの試合においてわれわれにイメージされるのは、おそらくスタンドから見たときの選手の華麗なプレーと見事なボールの連係であろう。しかし、選手の立場において連係プレーを捉えたとき、その背後にいかにも多くの共創プロセスとそのため場の共有が重ねられているかが明らかになる。

これを確認するために、いま自分がグラウンドに選手として立っている状況を考えてみよう。このとき生じる困難は、各々の選手は、それぞれ異なる多様な時間と空間を生きているということであり、それらの間での共有可能性を必ずしも前提できないことである。これは言い換えれば、システムのダイナミクスを記述する共通基盤としてのニュートン的な均質な時間や空間をここでは前提できないのである。では、どうして選手の間で時空間的コーディネーションが可能になるのであろうか。共創システムは、ここから問題を考え始める。時空間が先にある、その中で人間が振舞うのではない。人間の振舞いの中に時空間という場が生成し、それが徐々に人々の間で共有されて行くと考えるのである。この点において、共創システムは従来型の科学技術を超えている。

時間と空間の共有という問題は、それらが創出されるということに認めて初めて意味をなす。そこで、われわれは時間や空間という場が一人一人の人間に創出されるものとして捉え、その重なりが生じるメカニズムについて考えるのである。そして、それに基づいて人間の共同作業を支援する共創のシステム論と技術を開発することになる。人間のコミュニケーションは、このような共創的な視点から支援されなければならないと考えている。だから、一人一人の選手において創出される「いま、ここ」という場が共有されなければ連係プレーは決して実現できないであろう。では、「いま、ここ」という場はどのように創出され共有されるのであろうか。

著者は、時間の側面から、このような協調作業を調べてきた。そこで明らかにされたことは、「いま」という創出される時間感覚は点ではなく、拡がりを持っていることである。しかも、それは認知される時刻としての物理的現在という点よりも未来の方向に向かって開かれている。つまり、われわれは未来として「いま」を生きていることになる。したがって、サッカーの連係プレーのような協調作業が可能であるとすれば、この創出される未来としての「いま」が共有されなければならない。これは時間感覚のレベルでの共有である。これが場の共有に対応する。この場を共有できるからこそ、サッカーの選手たちは未来のエピソードを共有し、相互に信頼し安心して即興劇としてのシナリオを創出することができるのである。このような意味において、場の共有とは未来の経験を相互に共有することであると考えることができる。

これをコンテキストの共有、あるいはシナリオの共有と置き換えれば、社会的コミュニケーションにおける安心感や信頼感の創出の多くの局面に、場の共有技術を適用できることが期待される。

4. 本シンポジウムの構成

そこで、本シンポジウムでは、共創コミュニケーションとしての場の共有の問題を取り上げる。そして場と深く関係する「身体性」と「社会性」に注目し、その分析と構成の両面からこの問題を捉えることになる。分析的アプローチとしては、場に対する認知科学や心理学の研究および理論的研究の発表がなされる。構成的アプローチとしては、インタフェースやメディア、ロボット、さらに実践的な取組み等から発表がなされる。そして、このような2つの異なる領域から相互乗り入れできる場として、本シンポジウムを活用し、最終的に上記の社会的状況への何らかの提言ができればと期待している。

一般講演では、両領域からの発表が交互になされ、それらの間での関連性に対する気づきが得られるように構成されている。さらに最後のセッションでは、講演者の中からパネラーをお願いして、フロアとの間でパネルディスカッションを実施する。ここでは「場の共有はなぜ必要か？」というテーマで討論を進める予定である。キーノートスピーチとしては、この問題に深く関わっておられる二人の研究者に講演をお願いしている。一人は早稲田大学の橋本周司先生であり、「共創のためのメカトロニクス」についてお話される予定である。もう一人は東京大学の上田完次先生であり、「共創的意思決定のシステム論」について話される予定である。

5. おわりに

最後になったが、このような人間と社会における場の共有を志向するシステム論と技術の研究領域である共創システムに、今後ともご理解とご支援をお願いしたい。さらに、皆様の本シンポジウムへのご関心とご来場を賜れば重ねて幸いである。

参考文献

- 1) 清水, 久米, 三輪, 三宅: 場と共創, NTT出版(2000)
- 2) 清水: 場の思想, 東大出版会 (2003)
- 3) 計測自動制御学会・SI部門・共創シンポジウム 2004 講演集 (2004)
- 4) 三宅: 共創とシステムインテグレーション, 計測と制御, vol.43, no.12, pp.993-997 (2004)